
1. アハバールフロムヨルダン 《代表からの挨拶》

(1) 代表からの挨拶

サダーカ代表 田村 雅文

2015年、いくつかの節目で皆さんの目に中東が飛び込んできたのではないのでしょうか。2月に日本人が人質となり殺害された大変残念な事件があり、9月にはシリア人の3歳のアイラン君が地中海に打ち上げられて亡くなった写真が世界を駆け巡りました。そして11月に起きたレバノンとパリでの事件はまだ記憶に新しいことかと思えます。

この間、紛争が続くシリアでは、これらの亡くなった方々と同じ命が何十万と失われ、この5年でその数は20万人を超えています。

シリアの国内は、水、電気といった基本的なインフラが大きなダメージを受け、冬の燃料はもちろん、パンや野菜といった食品まで物価の高騰が生活を大きく圧迫しています。海外の親戚からの送金なしでは、シリア国内の人たちはほとんど生きていくのが困難ではないかと言われています。3人の子どもを持ち家族とダマスカスで暮らす友人からは、徴兵制がとてもしんどくなっていて、逃げるに逃げられない若者たちがほぼ家に監禁状態になっているとも聞きました。

私が住むヨルダンに目を移してみると、爆弾が飛んでこないだけ良いというシリア人もいる一方で、生活はギリギリの状態にあります。今年の夏に180件もの家庭を訪問した明治学院大学の学生グループによれば、シリア人のほとんどが借金で食いつないでいる状態です。ヨルダン政府は厳しくシリア人の就業を禁じているため収入源もありません。それでも隠れて働くシリア人は多く、見せしめの為に捕まってシリアへ強制送還されるケースも後を絶ちません。先週訪ねた家庭の14歳の女の子は別のシリア人難民の男性と婚約し来年には結婚を予定しているとのこと。別の家の19歳の女の子は、父を既に亡くしており、母親を助ける為に去年ヨルダン人と結婚したものの、夫が麻薬中毒で結婚後投獄され、今では1歳半になる息子と母を抱えながら、義理の家族に遠慮がちに世話になっています。家庭訪問で訪ねるほとんどの家には、慢性疾患の方が一人はいます。先月の訪ねたお家では、糖尿病と高血圧で薬代が払えず、ぜーぜー言いながら支援を嘆願されました。半年ぶりに訪れたシリア人の戦争による負傷者が運ばれる病院では、10代後半のごく普通の若者に「殺されるか、戦うか、それ以外に選択肢なんて無いんだ。」という言葉投げかけられ、言葉を失いました。

シリアの政治的解決・・・ジュネーブからモスクワへ、そして今ウィーンでの動きが始まっていますが、未だに明るい光は見えてきません。今年11月13日のウィーンIII会議で世界17か国が6ヶ月以内の移行政権発足や18ヶ月以内の国連監視下での選挙実施についてのシナリオに合意したものの、この会議には当事者であるシリア人が参加しておらず、このプロセスにどうシリア人の声を反映させていくかが大事になってくると思います。

2015年の終わりに際し、可能な限りの多くのシリア人が納得できる形で、この紛争が一刻も早く終わるように、私たちにできることを続けていかなければと気持ちを新たにしています。皆さんからの寄付は、厳しい環境にいるシリア人への支援ということだけでなく、「シリアへ関心を持ち続けるよ」というメッセージであるとも捉え、シリアの人たちの状況、想い、そして彼らの声を可能な限り伝える努力を続けていきたいと思っています。シリアの平和を願って。

(1) シリア人家庭へのホームステイを通して

サダーカ・インターン 板倉美聡さん（大阪大学）

さて、おうちについたのが17時頃。ライダさんは可愛い子どもたちと一緒にとびっきりの笑顔で迎えてくれ、早速シリアの家庭料理をふるまって下さいました。（夜ごはんと思いきや、22時にもう一度ご飯が出てきたのであとで昼ごはんだったことが発覚。）



まず困ったのが言語です。自慢じゃないですが、私はアラビア語なんて「アッサラームアレイクム（こんにちは）」しか話せませんし、彼女たちも英語は全く話しませんでした。ここで役立つのが「指差し会話帳」です。子どもたちも、会話帳に大きな興味を示してたくさん質問をしてくれ、「職業は？」「学生だよ！」「何人家族なの？」「お父さん、お母さん、お姉ちゃんと4人で住んでるの。」なんていう会話が成り立ったりもしました。言葉が容易に通じないというのはとても不便なことのように感じますが、でも言葉が簡単に通じないからこそ、全力で相手の言うことを理解しようと必死で耳を傾け、こちら側も全力でどうにか伝えようと

する。そうやって一つ一つのコミュニケーションに必死になることで、伝わった時や理解できた時の感動は何倍も大きくなります。言葉が通じないことが、逆に私と彼女たちの時間を濃密にしていたのかもしれない。

もうひとつ私が感じたのが、シリア難民に対するステレオタイプの存在です。日本では、シリア難民と聞けば、“可哀想”というイメージを持つことが多くあるように思います。ライダさんのおうちには可哀想という言葉は似ても似つかわしくないように感じました、それこそ夜1時頃まで、子どもたちは部屋で暴れまわり、簡易なローラースケートのおもちゃをこれでもか！というスピードで乗りまわし、黄色い歓声をあげて遊び続けていました。そんな中、子どもたちはテレビで音楽をかけて「踊って！」と私に一言、大学でダンスをやっていたこともあって少し踊ってみると想像以上に大喜びされ、「今度は歌いながら踊って！！！」とのリクエスト。これまた不覚にも大ウケしてしまい、「次は私が一緒に踊る！！！」と二女が言い出したのが最後、「次は私！」「次は僕！」と子どもたちが次から次へと飛びかかってくるため、歌いながら踊るという大変呼吸器官にダメージを与える動きを連続5回行うことになりました。（本当に本当にしんどかったです。）手振り身振り、私の動きをまねる子どもたちにダンスレッスンをしたり、流行りのアラブミュージックに合わせてみんなで踊ったり。

アメリカに行った時もアフリカに行った時もそうでしたが、音楽というのは世界共通言語で、それ一つでどこの国の人もコミュニケーションをとれるようになるのだから、こんなにお得な言語はありません。また、子どもたちの明るさとたくましさは私の中で大きな衝撃として心に残っています。寄付を募るためにいわゆる“可哀想”なシリア難民の写真が世に出回ることは多くあります。しかし、突き抜けて明るい子どもたちは、そんなシリア難民の暗いイメージを吹っ飛ばしてくれました。シリア難民って言ったって、毎日不幸のどん底でどうしようもないわけじゃない。どんな過酷な環境に置かれても、子どもは笑うし、遊ぶし、喧嘩もする。こんなにもたくましい。紛争と言う、理不尽な“大人の事情”なんかに負けず、あの可愛らしい笑顔のまま育て欲しいと、心から思います。

しかし、そんな明るいライダさんのおうちですが、それでも戦争の影を感じる瞬間はありました。指差し会話帳でライダさんのお姉さんと話している時のことです。地図上にシリアの文字を見つけた瞬間、「スーリア！」と声をあげ、私たちの故郷はここだ、ここからきたんだと一生懸命身振り手振りで説明してくれました。

そして「とても美しいところなの。」と話すその口ぶりには、故郷への深い愛情と望郷の思いを感じました。

また、次女のイスラちゃんの細い腕には大きな傷跡があり、それがあとで紛争時の爆撃の影響なのだと聞かされたときには、なんだか言いようのない気持ちがこみ上げてきました。

「シリア難民が300万人を超えた」と数字で語る時、その個人個人の物語は埋没してしまいます。でもこうやって人々を目の前にしたとき、その腕の傷に戦争の面影を見たとき、300万という数字はもっとリアルに感じられて重くのしかかり、なんでこんな悲しい戦争が終わらないのかと、これだけ人を苦しめてそれでもなお戦争を続ける意義がどこにあるのかと、どうしてそれが分からないのかと、子どもみたいな単純な疑問が浮かんできては 何とも言えない虚しさに襲われました。

去り際にライダさんは「子どもたちはあなたのことをとっても好きだったと思う。あなたはとってもFunnyでダンスが上手だったわ。あなたも今すでに私にとって特別な存在だから、ヨルダンに来た時はホテルなんてとらなくていいのよ、うちに泊まりに来てね。」と言いながら、笑顔で抱きしめてくれました。

「シリアの人たちの濃密な人間関係の作り方にすごく感銘を受けた。」と、NGOの代表を務める田村雅文さんが語ってくださったように、私もこうやって見ず知らずの日本人をこうやって温かく受け入れてくれる、彼女たちのホスピタリティに感心させられずにはられませんでした。

彼女たちが一日でもはやく故郷に帰れる日が来ることを、願ってやみません。



(3) 仕事なく一日3. 2ドル以下の生活、つる望郷の念

NEWSソクラ・インターン 板倉 陽佑 (NEWSソクラ ; URL : socra.net)

3歳の男児の遺体が、海岸に打ち上げられた写真を皮切りに「難民」への注目が一気に高まりました。未だ戦闘の続くシリア紛争による難民は、今年に入って累計 400万人を越え、欧州の指導者たちは、次々と迫る難民への対応に迫られています。世間の注目は、海を渡る難民に注がれるが、一方、陸路で安全な場所を求める難民も多くいる。シリアの隣国であり、世界最大規模の難民キャンプのザータリキャンプ（最大収容人数13万人）が存在するヨルダンに入り、首都アンマンにて板倉陽佑がシリア難民に話を聞いた。

シリア南部の町ダラアから来たワシーム (24) は、妻と 4ヶ月の息子をシリアに残したまま。2ヶ月前に、アサド政権が仕掛けた地雷の爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされた破片で目を負傷し、ヨルダンに緊急搬送された。全盲のリスクもあり、右目は失明したものの、左目は助かった。しかし、以前の 50%ほどの視力しかない。現在は、アンマン市内のマカーシド病院に入院している。南部のダラアは、政府軍による空爆も頻繁に行われているというが、ワシームは治ったらすぐにシリアに戻ると言う。「どんなに危なくても家族がいる故郷だ。それに息子に会いたくない父親なんているかい」と語った。アンマン市内のマカーシド病院は、2階と4階を難民病棟としシリア難民たちを受け入れている。難民の治療費は、国連が保証するため難民の費用は無償だ。昨年より受け入れを開始し、40床以上あるベッドはいつも満杯である。看護師長のウサーマ (25) は「紛争でケガをした人々は、厳しい状態の患者ばかりだ。看護師、医師にはかなりのプレッシャーがかかっている」と語った。

ダラアから、10歳の弟と共に逃げてきたモハンマド (14) は、ここ数日の砂嵐で肺を痛め入院している。「家に爆弾が落ちたんだ。知らない女の人と一緒に弟と逃げてきた。」両親は、離婚し父とシリアで暮らしていた。爆弾が落ちた直後のことは、あまり思い出せず父親の安否も分からない。現在は、弟と養護施設で生活していると

いう。モハンマドは「シリアには戻りたくない。（お母さんのいる）エジプトに行きたい」と語った。ダラアでは、空爆が頻繁に行われ、毎日のように一般市民が亡くなっている。

このような怪我を負った人々向けに、アンマン市内では、ヨルダン人によるシリア人支援も行われている。アンマンに拠点を置くNGO、AMR (Arab Medical Relief) は、市内に暮らすシリア人へのリハビリを行っている。運営するリハビリ施設には、老若男女問わず 60人のシリア人が通う。「罪のない彼ら（シリア人）に何かできることをしたい」自身もシリアにルーツを持つという女性職員のサラ (29) は語る。この施設に通うシリア人男性のオバダ (20) は、3年前シリア南部のダラアで政府軍に背中を撃たれ下半身不随となった。今は、車椅子で生活を送る。今は、「自分と同じような人々に、何かしてあげたい」と障害平等研修 (DET : Disability Equality Training) のトレーナーを目指している。五体満足でヨルダンに辿り着いても、安心して暮らしていけるわけではない。UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) によると、アンマン市内で暮らすシリア人難民の 86%は毎日平均3.2ドル以下で生活している。

2ヶ月前に、シリアの激戦地ホムスから来たアドゥハム (27) は 7人家族。妻と足の悪い母親、5歳から10ヶ月の4人の子供を抱える。6畳一間を間借りし、家族で寝泊りしている。風呂、トイレは近所の家に借りるという。一家は、16日間をかけて歩いてヨルダンへの国境に入り、首都のアンマンに辿り着いた。「母親は、まだ一回しか病院に行かせてあげられていない」アドゥハムは、20代とは思えない疲れきった顔で言った。ヨルダン国内では、難民は仕事に就くことができない。加えて、ヨルダン政府は、今年に入ってこれまで難民に配給していたフードクーポンの額を、毎月一人あたり24JD : ヨルダンディナール (約4000円) から、家族構成に応じて10JD (約1700円)、5JD (約850円)、配給なしの三段階に変更した。また、難民登録のために新しい IDの発行を決定し、その発行には60JD (約10000円) の費用がかかる。新しいIDがないと難民は、病院での受診も学校への通学も許されない。今回の取材では、30人以上のシリア人に取材をしたがそのほとんど全員が「シリアに帰りたい」と述べていた。中には、危険を冒しても紛争中のシリアに戻ると語った人もいた。しかし、多くはいまも帰郷の念を持ちながら異国にて、故郷に平和が訪れるのを待っている。

※障害平等研修 (DET : Disability Equality Training) 障害者における社会的な差別を撤廃するために行われる啓発活動。

[https://socra.net/.../%e6%88%a6%e9%97%98%e3%82%92%e9%81%bf%.../...](https://socra.net/.../%e6%88%a6%e9%97%98%e3%82%92%e9%81%bf%.../)

(4) シリア人によるシリア人のために

サダーカ・ボランティア 佐藤友紀

アンマン市内のシリア人女性と子どもたちが住むセンターで、ヨルダンに住む日本人有志が千羽鶴のアクティビティを行いました。「ここにいるととても落ち着くわ。シリアに戻ったみたいと感じる時もあるのよ。」ここに住むある女性の一言。シリア人によるシリア人のための場作りの試み。シリアに帰ったときも、こうした試みがきっと新しいシリアを創っていく礎となるはずです。



2015年11月27日 (金曜日)、アンマン市内にある、夫を亡くした女性及びその子どもの住むセンターにて、サダーカのボランティア及びヨルダン在住の日本人有志により、千羽鶴を折るイベントを行いました。このセンターにはサダーカが数回訪れていたのですが、お母さんや子ども達に対するケアが手厚く、かつ将来の自立を主眼としたサポートや教育が充実しているのですが、定期的にイベントを行っている中、何か日本に関するイベントをやりたいとの要望を受け、行ったものです。

イベントは2日にかけて行われ、まず1日目に、千羽鶴の趣旨を説明し、10名程度のお母さんに鶴の折り方を教え、他のお母さんや子ども達に教えておいて貰いたいことを伝えました。また、2日間にはセンターに住むお母さんと子どもを含め50名程度で実際に千羽鶴を完成させました。シリア人の方は手先が器用な人が多く、あっという間に上達し、どんどん鶴が折りあがっていきました。合間に書道のイベントを入れるなどし、イベントは大盛り上がりで、センターからも子ども達のクリエイティビティを向上させるため、また継続して折り紙を教えて欲しいという要望を受けました。

このセンターにいる人の多くは父親が亡くなったり、行方不明になった人ばかりです。また逃げてくる途中で辛い思いをした人もたくさんいます。こういったシリア人家庭は多く、特にアラブ社会では女性が働く習慣があまりないために経済的に困窮するケースが多く見受けられます。このセンターでは女性の心理的ケアと同時に職業訓練を取り入れ、将来的な自立を目指していますが、今回のイベントを通じてセンターの一助となったことを祈っております。以下、センターに住むとある未亡人のお母さんから聞いた話です。

“ホムスに住んでいた時、夫がある日ダマスカスに出かけて帰ってくる途中にいなくなったわ。亡くなったか、牢獄に入っているかね。シリアからヨルダンに来るのに16日かかったわ。ダマスカスから南下するバスに乗るのは「ホムス出身者は乗せるな」と言われているから乗れないと言われたの。全くなんでだか分からないけど、結局賄賂を払ってチケットを取ったわ。ヨルダンの国境は閉まっていたので国境手前の学校で12日間学校で待たされたの。でも学校の裏では発砲が繰り返されているのよ。とても怖かった。ザアタリキャンプに入ったのだけど、ほこりが酷くて喘息やアレルギー、麻疹が流行っていてここにいたらだめだと思った時に幸運にもこのセンターに入ることができたのよ。ここにいるととても落ち着くわ。シリアに戻りたいと感じる時もあるのよ。”



(5) シリアの人たちに羊を振る舞う：ヨルダンのサダーカサポーターより謝辞

月の満ち欠けによって毎年その時期が変わるイスラーム教徒の犠牲祭というお祭り。毎年恒例になりますが羊肉が振る舞われます。年中行事という意味では、多くの親戚が集まりお祝いをする日本のお正月などに近いかもしれません。今年は偶然日本のシルバーウィークと同じ週でした。普段肉を買うことができないシリアの人たちに少しでも家族で羊肉を味わってもらおうと、サダーカは今年も10頭ほどの羊を購入し、アンマン郊外の各家庭に配りました。

普段、サダーカの家門訪問を一緒に行ってくれているアブターレク氏（写真の白い服の男性）から普段から寄付を頂いている皆さまに以下のような感謝のメッセージを頂いていますので、共有させていただきます。

毎年同じ祈願となり辛いところではありますが、来年の犠牲祭こそは紛争の無いシリアで多くの人が迎えられますように。

“Ladies and gentlemen from Japan a big thanks for you and for who were contributed and shared with us at this work to be done by giving the best they could and potent way. Also, they have established Sadaq' a Japanese Arabic organization which gave and has still given so far a help and support for a hundreds and thousand of Syrian refugees who are living in Jordan .

For a Japanese young men and women especially the students who contributed with us that through visiting. The Syrian refugees families and they have felt with them their suffering and the tough living that are facing. As well as those people who live in a camp or in the houses that are not proper for human living.

For a great Japanese people I would like to say that I am Abo Tareq who is represented The Sadaq'a Japanese Arabic Organization in Jordan and with pleasure I would like to extend our happiness about. This noble work and I would like to thank whole of you and extend our gratitude, appreciations and respect about your efforts for helping a poor of the Syrian refugees and we must say that refugees have suffered too much and this crises have made to them bad and tough memories.

We should also know that many of them have lost children, brothers and relatives. As well their houses were demolished or got out from it by force. Families have lost each other that made a brother hasn't known what happened to his brother and father. As well wife doesn't know anything about her husband is he survived?! Or in prison or outside or he is gone?! . Whole of those don't know anything about each other. In fact, those people have found a good hand to help them and a warm bosom.

Sadaq'a was the first who stood beside those refugees to provide them many many of the requirements that are needed such as money, medical, retail things and a lot.

For five years Sadaq'a has still presented. Hence this is really a great and awesome helping for those of the Syrian refugees.

In fact, Sadaq'a presented through the last days many gifts as it is obvious at some pictures in Al adh'a Eid. As well as the plan was 1. Present meats for tens but this year the number exceeded to the hundreds of poor people and who is needed help.

Sadaq'a always waits a proper opportunity to extend a help as what happened lately even that happens all the year.

As well as that a great those a great men from Japan have known a lot in general about Syrian refugees here in Jordan. Also, Japanese men were helping at the field they came with us to visit and give a help. I would also say that their support and helping was by making a research such as studies, taking pictures and writing reports in order to transfer a good and real image to their colleagues in Japan to be obvious.

I would like to extend my thanks and gratitude for tens and hundreds of Japanese people who were my guests for who came with me and contributed at this humanitarian work for who has known me through visiting last years.

I would love to extend on behalf of me and those refugees with whole appreciations and my gratitude and my love. Also I am very thankful for who was a sponsor, contributed and donated in Japan or around the world. For those who have worked with us to help those Syrian refugees.

Thanks every one My wishes to you to be blessed and a happy life.

Best regards

Al-Sheak Abu Tareq from Jordan - Amman ..

Septembr 2015



2. アハバールフロムニッポン 《日本での活動の報告》

(1) あるシリア人女性からのメッセージ ～70回目の終戦記念日にシリアと世界の平和を願って～
日本での戦争が終わって70年、シリアの紛争が始まって4年。かつて豊かな日常があったシリアで2011年から続いている紛争。シリアで日本語を学び、今も紛争下の首都ダマスカスに住むシリア人女性から届いたメッセージをもとに紡いだ、60秒間の平和のメッセージを作成しました。

※ この動画に込めた想いはこちらをご覧ください→ <http://ow.ly/QVyMh>

※ 関連して行った8月9日の様子は、以下のクリスチャントゥデイの記事もご覧ください。

<http://www.christiantoday.co.jp/articles/16764/20150811/sadaqa-syria-peace-symposium.htm>

(2) キュメンタリー映画『目を閉じれば、いつもそこに』、UNHCR難民映画祭で上映

サダーカが撮影に協力したドキュメンタリー映画『目を閉じれば、いつもそこに』が毎年行われているUNHCR難民映画祭で上映されました。北海道、東京、大阪各地での上映のほか、関西学院大学はじめ一部の大学、またイベントなどでも上映されました。以下、監督とプロデューサーからのメッセージをご紹介します。

尚、市民上映を御希望の方は、以下まで御連絡下さい

<https://www.facebook.com/LovingourHomeSyriaForever/timeline>

藤井沙織監督

「抱きしめられたときのぬくもり。たっぷりした皺の魅力的な笑顔。シリアの人たちに出逢って『豊か』という言葉を知りました。家族、友人、恋人、みなさんの大切な人を想って見て頂けると嬉しいです。そして何より、この映画がシリアの平和への小さな一歩に繋がることを願っています。」

佐藤友紀プロデューサー

「長い歴史と豊かな文化、優しい人々・・・かつてのシリアは多くの人を魅了する場所でした。この国で起こった混乱に翻弄され続けるシリアの人の声に、是非じっくりと耳を傾けてみてください。」

田村雅文プロデューサー（サダーカ代表）

「映画の出演者はもちろん、私がヨルダンで訪問してきた多くのシリアの人たちは皆、故郷を想い、故郷へ戻りたいと話します。この映画が、紛争を終らせ、彼らの願いを実現するきっかけになることを祈ります。」

http://unhcr.refugeefilm.org/2015/message_home_syria/

★☆☆

このメールマガジンは、勝手ながらこれまでシリア支援の関係でお会いした方々、ご支援を頂いている方々へお送りしております。今後の配信を希望されない方は、お手数ですが、以下までご一報を頂きますよう、お願い申し上げます。配信停止はこちらまで：info@sadaqasyria.jp
なお、このメールの配信元の akhbar@sadaqasyria.jp は配信専用ですのでこのメールへの返信はできません。

★☆☆